いるのは、ごく自然な風景として感じていました。

堀井　中之島はパリ・セーヌ川のシテ島と似ていると言われますが、これも磨かなければ活かせません。そこで今年10月、水の都・大阪の魅力をもっと楽しんでもらおうと、土佐堀川に面したレストランなどが「北浜テラス」という大阪版の川床を試行しました。その1軒がこのお店で、川をはさんで中之島のバラ園や「ばらぞの橋」が見渡せます。来年開催の「水都大阪2009」には、こうした川床がずらっと出てほしいなと思っています。

藤岡　川べりに洒落たお店があって、美しい花や緑があれば、人も自然と集まるでしょう。そこで憩う習慣ができれば素敵ですね。

寺田　日曜日の朝早くに、犬を連れて中之島を散歩したことがあります。休日の中之島は、静かで独特の美しい雰囲気がありますよ。

藤岡　私も散歩は大好き。まちに出て、人々の話し声を聞きながら歩くのが楽しいんです。じつは私の母と妻は関西の生まれ育ちで、母は生前、最期は関西で暮らしたいといっていました。だからまずは、「ふるさと納税で、お金の代わりに息子を関西にお返しします」ってね。

堀井　そうですか。息子さんを差し出されたお母様にも、私たちは感謝しないと。

チャンス発見都市

堀井　藤岡さんご自身は東京のお生まれですが、大阪に本拠を据えて音楽活動をしようと思われたのはどうしてですか。

藤岡　私は1995年に日本フィルハーモニー交響楽団（東京）の指揮者として日本デビューしましたが、30代の若い私に、とても多くの良い経験をさせてくれたのが関西でした。だから2000年に関西フィルハーモニー管弦楽団から声をかけていただいたときは、とても嬉しかったですね。

堀井良殷 理事長

堀井　関西ではどのようなご経験を積まれたのですか。

藤岡　関西フィルから声がかかる前は、大阪の放送局がシンフォニーホールで私を長く起用してくれたり、大阪新音から、京都市交響楽団（京響）でベートーヴェンの「第九」を3年間毎年7公演も指揮する機会をいただいたこともありました。これってすごいことなんです。第九の指揮はとても難しいうえに、京響を一度も指揮したことのない私に、そんな大きな契約をしてくれるなんて、おそらく大阪新音は、「どうせ1年目はたいしたことはないだろうけど、藤岡に才能があれば3年も続けてやらせたら良いものになるだろう」っていう考えで、若い私にチャンスを与えてくれたんだと思います。また、フェスティバルホールで行われている大阪国際フェスティバルですが、2000年の第42回のオープニング公演で、指揮者に起用していただいたこともあります。オーケストラは地元大阪フィルハーモニー交響楽団でした。関西は若手を思いきって使ってくれるところです。こうした経験は私にとって大きな肥やしになり、とてもありがたく思っています。

寺田　昔のようなタニマチではありませんが、大阪・関西では、才能のある人を育てようと呼びかけたら、結構多くの賛同者が集まるんです。

藤岡幸夫（ふじおか さちお）氏
1962年東京生まれ。幼少よりピアノ、チェロを学ぶ。慶應義塾大学文学部卒、英国王立ノーザン音楽大学指揮科卒。1995～2000年 マンチェスター室内管弦楽団首席指揮者。95年の日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会の指揮者として日本デビュー。
2000年関西フィルハーモニー管弦楽団正指揮者、07年 同楽団首席指揮者。

藤岡　そうですね。若い人の才能や、事業などの新しいアイデアをしっかり応援してくれる土壌があると思います。

寺田　私が興した「引越サービス」も、大阪で事業化に成功しました。インスタントラーメンやスーパーマーケットなどのように、大阪発祥で全国に広まったものはじつに多くあります。

堀井　大阪人は、本物を見る眼をもっていると思います。まさにチャンス発見都市です。

批評家を育てる

堀井　藤岡さんはヨーロッパで長く活躍されましたが、海外から日本の文化のありようをどのように見ておられましたか。

藤岡　1995年から6年間、イギリスのマンチェスターに住んでいました。そこから見た日本の文化や経済は、東京だけしか発信していないように感じました。ヨーロッパでは、マンチェスターをはじめミュンヘン、ハンブルグ、バーミンガム、ボルドーなど、各国の地方都市がしっかりとしたステイタスをもち、さまざまな文化を発信しています。日本は先進国だといわれていますが、なんでもかんでも東京に一極集中しているようでは、まだまだ発展途上だと思いましたね。

堀井　クラシック音楽の分野ではどうでしょうか。

藤岡　日本と欧米の大きな違いをひとつ上げるとすれば、それは「批評」です。欧米では、定期演奏会を行った1～2日後には、新聞各紙に必ずその批評が掲載されます。若い演奏家や作曲家、オーケストラにとって、批評を受けることはとても大事。批評家がオーケストラや作曲家、演奏者を育てるといっても過言ではありません。しかし日本では、そうした批評が皆無に等しい。

堀井　正しい批評がたえず載っていることが、良い演奏家を育て、良い観客をつくりだすと。

藤岡　もちろん、だめな演奏会は酷評していいんです。でも1紙だけじゃアンフェアだし、叩かれるオーケストラもたまったものじゃない。こっちの新聞は叩いているけど、あっちの新聞は褒めているという状況が必要で、それがわかればクラシックに興味を持つ人も増えるでしょう。